

向拝



はじめに、神社建築の基礎としていくつかの名称を挙げます。

向拝（こうはい）一社殿正面の突き出た部分です。向拝がある造りは流造と呼ばれます。向拝のない社殿の造りは神明造と呼び、伊勢神宮が典型です。

向拝柱（こうはいはしら）一向拝を支える柱。

水引虹梁（みずひきこうりょう）一梁（りょう）とは柱と柱の頭部をつなぐ役目のある構造材料のことで虹梁（こうりょう）とは虹型に上方に反り返った梁のことです。水引虹梁は向拝正面の虹梁のこと。

海老虹梁（えびこうりょう）一海老のように曲がっている虹梁で高さの異なる柱をつなぐ。海老のように水に関係した名称にするのも建物にとって火災は重大なことなのであえて水に関係した名称をつけるとも言われています。



日吉神社の向拝の**破風**（はふ）の部分。破風に取り付けられている板を**破風板**と呼びます。社寺のような伝統的建築では破風板に彫刻を施しています。また、頭部に丸みを帯びて造形した破風を**唐破風**（からはふ）と言いますが、特に中国に關係する物ではなく単に新しい物に唐とつける場合が多かったようです。破風板に日吉神社の神紋である**巴の紋**が見えます。

巴の紋は神紋の代表と言われるほど広く用いられています。一つ巴、二つ巴もありますが三つ巴が一般的のようです。右回りも左回りもあります。巴とは、弓を射るときに使う鞆（とも）を図案化した物（鞆絵）と言われています。その紋の文様については勾玉（まがたま）をかたどっているという説や水が渦を巻く様など諸説あります。神社建築においては社殿の軒瓦に巴紋をつけることは魔除けや防火の意味があると言われています。

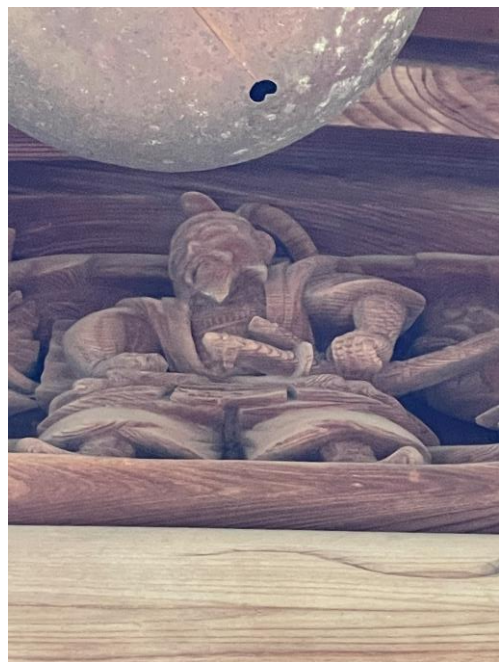


木鼻とは木の先端という意味の《木端(きばな)》が転じて《木鼻》に書き換えられたものです。向拝正面の水引虹梁が向拝柱の左右へ頭貫した部分と、海老虹梁が向拝柱を頭貫し前方へ飛び出したところが木鼻と呼ばれています。この木鼻は漢です。左の鼻の長い木鼻は象のように思われますが、目を見開いていることと巻き毛ということで漢であると思われます。

獬は実在する動物ですが、日本では古代中国で誕生した想像上の神獣が信仰されました。鼻は象、目は犀、尾は牛、足は虎で、体形は熊に似ているとされます。獬の像は邪気を払う力があると信じられていたので社寺建築には多くの獬の像が使われています。



兎の毛通し(うのけどおし) (破風板の下につけた装飾用の材)は龍に乗り四海に遊ぶ**玉匣弾琴**の彫刻。(ぎょくしだんきん) (玉匣弾琴の玉匣とは列仙伝(中国の道教にまつわる説話集で、70人の仙人たちの伝記が載せられている。)によると西王母(せいおうぼ)(中国の神話上の女神)の末娘で、彼女が一弦琴を弾くと多くの鳥が集まったと言います。また時には白竜に乗り四海を周遊したと言います。



玉匣弾琴の彫刻のうしろ側で鈴の真後ろで見えにくいですが、唐破風下には**竹内宿禰**(たけのうちすくね)の彫刻が見えます。**竹内宿禰**は古事記、日本書紀に伝わる人物で、景行天皇から仁徳天皇(第12代から第16代)までの五代の天皇に仕えたと言われている伝説上の忠臣です。国家に忠誠を尽くし多くの人々から崇められた人物として戦前の紙幣にはしばしば肖像が用いられました。従って、戦前までは誰でも知っている人物だったのでこのように彫刻になっている訳ですが、戦後は神話が学校で教えられなくなったので、忘れ去られてしまったと言えます。竹内宿禰は本殿の彫刻にも見られます。(後述)



竹内宿禰の左側に見えるのは竹内宿禰に竜宮から宝珠（満珠と干珠）を献上している**阿曇磯良**（あづみのいそら）（海の神）の彫刻が見えます。

記紀によると第13代成務天皇が亡くなり倭建命（やまとたける）の子が仲哀天皇（第14代）として即位したところ皇后（神功皇后じんぐうこうごう）に神が降臨し新羅を服従せよとの宣託が下りたのですが仲哀天皇はそれを疑ったためにすぐ亡くなってしまいました。神は竹内宿禰に皇后の胎内にいる子が世継ぎだと述べたので、神託した神の名を問うと住吉三神*だと述べました。また新羅に出撃の際は神祀りを尽くすようにも言われました。

『太平記』によると、神功皇后は三韓出兵の際に諸神を招いたが、海底に住む阿曇磯良だけは、顔にアワビやカキがついて醜いのでそれを恥じて現れませんでした。そこで住吉神は海中に舞台を構えて阿曇磯良が好む舞を奏して誘い出すと、それに応じて阿曇磯良が現れました。阿曇磯良は龍宮から潮を操る霊力を持つ潮盈珠・潮乾珠を借り受けて皇后に献上し、水先案内人となったので、そのおかげで皇后は三韓出兵に成功したのだと言われています。なお、住吉三神は伊邪那岐が黄泉の国から戻って禊をした時に生れた神で、航海の安全を守る神です。

*住吉三神（すみよしさんじん）－古事記では底筒之男神（そこつつのおのかみ）、中筒之男神（なかつつのおのかみ）、上筒之男神（うわつつのおのかみ）の三神の総称です。伊邪那岐の禊ぎによって生まれた神で、大阪の住吉大社に祀られているので住吉三神と呼ばれています。



竹内宿禰が出たので本殿の彫刻の**竹内宿禰**を見てみましょう。本殿西側の脇障子に見えるのが応神天皇（神功皇后の子、品陀和気ほむだわけ）を抱く竹内宿禰の彫刻です。神功皇后が新羅に出撃したときは妊娠していたとされお腹に石を巻いていたと言われています。神功皇后は新羅から戻り九州の宇佐にて品陀和気を生みました。そのときの様子を彫ったものと思われます。



本殿彫刻のもう一つの脇障子（本殿東側）には神功皇后が彫られています。神功皇后は男装をして新羅に向かったとされこの彫刻はそのときの話を彫った物と思われます。神功皇后も竹内宿禰と同様にお札の肖像にもなりましたので昔の人々はよく知っていました。



拝殿正面に戻って、向拝の左側正面の壁の彫刻を見てみます。三段になっていて、一番下は猿、二番目は雉、一番上には龍が彫られています。

猿は日吉神社の**神使（しんし）**です。日吉神社の御本社は滋賀県比叡山の麓にある日吉大社ですが、その御祭神は**大山咋神（おおやまくいのみこと）**ですがその神使（眷属けんぞく）が猿とされています。

猿は勝る、魔去る、と言われ縁起の良い動物と言われていました。従って、日吉大社では実際に猿が飼われていて、色々なところに猿の絵や彫刻などを見ることができます。

しかし、同じ大山咋神を御祭神とする京都の松尾大社では亀が神使とされています。亀は元々「鶴は千年亀は万年」のように長寿のイメージがあり縁起の良い動物の象徴なので日吉神社にも下のようにいくつか亀の彫刻が見られます。

向拝柱と海老虹梁に挟まれた手挟み（てばさみ）の部分です。





向拝の右側の正面壁にも猿、雉、龍の彫刻が見られます。

雉は古事記では神様のお使いとして登場します。

天の神々の命令で地上に送られた天若日子（あめのわかひこ）は野心から大国主の娘を娶り地上支配を企み、天への報告を怠っていたので雉の鳴女（なきめ）を地上に派遣しました。しかし天若日子は天から授かった弓矢で鳴女を射殺してしまいます。その屋は鳴女を貫いて高天原にいる高御産巢日神（たかみむすびのかみ）のもとに届きました。その矢を拾った高御産巢日神は天若日子に邪心がなければ当たらないと地上に投げ返しました。矢は天若日子の胸に命中して天若日子の野望は打ち砕かれたのです。このように、雉は神様のお使いとして古くから霊鳥と言われてきたのです。

雉の彫刻の上には龍が彫られています。龍は古代中国の時代からあらゆる動物の頂点とされてきました。日本では水神として祀られているので社殿を火災から守るという意味があると考えられます。水神なので手水舎にも多く使われています。日吉神社にも数多くの龍が彫られています。後の章でまとめて日吉神社の社殿の龍を取り上げます。



次は海老虹梁と本柱と継ぎ目を見て下さい。左の写真は、正面向かって左側の内側です。鯉が彫られています。この鯉の彫刻の裏側を見ると龍が彫られています。鯉は登竜門伝説で知られるように、龍に変身するので立身出世を象徴する縁起の良い動物とされています。そこから江戸時代になって鯉のぼりが生まれました。登竜門伝説はポケモンでもコイキング→ギャラドスへの進化に取り入れているように非常に有名な伝説です。龍は前に説明したように水神ですから、このように水に関係した動物が多く彫られているのも火災への恐れからなのでしょう。

同様に、右側の海老虹梁にも内側に鯉、外側に龍が彫られています。

（次の写真）



次に拝殿の左側面を見てみましょう。彫られているのは鶴です。鶴は古代中国では仙人の乗り物とされ不老長寿の象徴とされていました。平安時代に日本にその思想が入ってきて、鶴は千年生きる動物だとされてきました。同じように長寿の亀と一緒に鶴亀はより吉祥を招く鳥だとされてきました。またこの彫刻では松が描かれています。松は常緑樹で常に青いので神様を待つ木とされ、日吉神社正面にも植えられていますし、日本庭園には必ず松が植えられています。鶴は長生きの象徴と共に夫婦仲が良く、一生連れ添うことから仲が良いことの象徴ともされています。このように縁起の良い鶴と松の組み合わせは昔からよく用いられてきたモチーフです。



日吉神社の社殿に彫られている九匹の龍

日吉神社の社殿の周りには九つの龍が彫られています。既に5匹の龍の彫刻を前章にて取り上げました。それらをまとめてみましょう。

1. **兎の毛通し（うのけどおし）**（破風板の下につけた装飾用の材）は龍に乗り四海に遊ぶ**玉卮弹琴**の彫刻。（ぎょくしだんきん）



2. 海老虹梁と本柱と継ぎ目に彫られている鯉の裏側を見ると龍が彫られています。これは鯉の登竜門伝説を表しています。左右に1匹ずつ、計2匹いますのでこれで3匹です。



3. 4匹目と5匹目は拝殿正面の壁に彫られている龍です。一番下に猿、その上に雉、その上に龍が彫られています。下図は拝殿の右側ですが同じように左にも彫られています。これで計五匹となりました。



4. これからは、新たに紹介する龍になります。最初は社殿正面に彫られている龍二匹になります。実はこの二匹の龍は裏面も彫られており、裏面は次頁の写真になります。





この右側の宝珠を持っている辰は令和六年の御朱印に取り上げられています。



宝珠は正式には如意宝珠と呼ばれあらゆる願いを叶えてくれる力を持っているとされています。形は円形あるいは玉ねぎの頭のような格好をしています。なお、社寺にはこの宝珠に似たものがあります。擬宝珠（ぎぼし）と呼ばれるもので日吉神社でも見られます。



5. ここで左右二匹の龍が見られました。これで合計七匹になりました。次の辰は拝殿ではなく本殿の方にあります。本殿左側面の上の方に見られます。



この緑色の辰になります。また本殿西側上部には次の写真の龍が見えます。



この龍は羽が生えています。龍は羽が生えていてもいなくても空を飛ぶことができます。この羽の生えた龍は飛龍と呼ばれ龍の子供とされています。日吉神社の御朱印の鈔紙の透かしのモチーフに使われています。これで九匹全ての龍が説明されました。

ここで本殿の彫刻を見てみましょう。



鄭據 (ていきよ)
狄兼謨 (てきけんぼ)
盧貞 (ろてい)



劉真 (りゅうしん)
白楽天
唐真 (りよしん)



胡杲 (こか)
吉旻 (きちびん)
張渾 (ちよううん)

本殿の彫刻の題材は**香山九老**です。唐の白居易(772-846) (白楽天 一人成人する時に与えられる名) が晩年に仏教を信奉して洛陽の香山寺(こうざんじ) にしばしば通いました。このように洛中(都の中)の友人と九老の会を作り香山で雅会(風流な集会)を開いて清談(俗事を避けて風流に親しむ生き方)を楽しんだ故事が香山九老です。(白楽天が74歳頃のことと言われています。)白楽天は中国文学史上李白や杜甫に次いで有名な大詩人ですが、実は唐王朝の大官僚でもありました。その文学は日本の文化や文学にも大きな影響を与えています。

なぜ本殿彫刻に白楽天の香山九老を選んだのかというとおそらく、有名な故事であることと、白楽天が晩年仏教を信奉していたということで、この彫刻が彫られた江戸時代はまだ神仏習合の時代であったので当時大日堂(天台宗の寺院)の管理下にあった山王社(日吉神社)の彫刻の題材として選ばれたのでしょう。まさに神仏習合の時代ををよく表す彫刻であると考えられるでしょう。

この彫刻は近隣にも類を見ない傑作として昭和56年4月23日付けで昭島市文化財の指定を受けました。彫師(ほりし) 谷部建次郎良長(やべたてじろうよしなが)の作画により塗師(ぬりし) 谷部重次郎(やべじゅうじろう)の筆により彩色され1855年に完成しました。